

シンポジウム

ブルータルコス と指導者像

報告者

瀬口 昌久 (名古屋工業大学)

松原 俊文 (早稲田大学)

中谷彩一郎 (鹿児島県立短期大学)

コメンテーター

木原 志乃 (國學院大學)

佐藤 昇 (神戸大学)

平山 晃司 (大阪大学)

司会

小池 登 (首都大学東京)

2015年6月6日(土)

首都大学東京

主催 日本西洋古典学会

(趣旨)

本シンポジウムは、近年急速に再評価の進むプルタルコスを対象に、哲学、史学、文学それぞれの視点から報告を行い、広く議論を交わし、理解を深める試みである。広範な著作群を誇る作家であるが、今回は特に『英雄伝』に焦点を当て、『モーラーリア』も視野に入れながら、そこに描かれる指導者像を切り口にして、多量かつ多彩な作品を残した作家に対する多角的な考察の呼び水としたい。

(報告要旨)

プルタルコスの指導者像と哲人統治の思想

瀬口昌久

プラトンが『国家』の洞窟の比喩(514A-521B)で、地下の洞窟から抜け出して世界の真実を知った者は、再び洞窟に降りて、壁に写し出される影を実物と見て見ている囚人たちを解放する務めを負っているように描いて以来、哲学者は現実の社会でどれほど積極的に行動して公共に貢献するべきかという問いに直面してきた。プラトン自身も哲人統治の思想を結実させただけでなく、その実現のために二度もシケリアに渡って身を危険にさらした。プラトンに続いて、ストア派の創始者キティオンのゼノンやクリュシッポスも国政への参加を促し、人生の最後まで公益に尽くすことを教義とした。しかし、公的生活を避けたエピクロス派をあげるまでもなく、政治的騒乱から逃れて観想的生活を理想とするのは、異なる学派の多くの哲学者に共通する姿勢であった。これに対して、中期プラトニストのプルタルコスは、エピクロス派の姿勢を批判し、政治的著作を数多く書き、なかでも『哲学者はとくに権力者と語り合うべきことについて』では、哲学者が支配者と付き合うことにより、その一人の人間を通して多くの人々に役立つと論じ(777A、778E)、為政者に助言を与えることが哲学者に課せられた社会的使命であるとしている。

しかし、プルタルコスがプラトンの「哲人統治の思想」(『国家』473C-D)のものにどれほど真剣にコミットしているかについては、研究者のなかでも大きな論争がある。プルタルコスが、哲人統治の思想について距離を置いているとみなす研究者も少なくない。例えば、プルタルコスは、彼の生きたローマ帝国の時代において、プラトンの政治理念がすでに時代遅れであるように描いているからで

ある（『アレクサンドロス大王の運あるいは徳について』 328D10-E7）。本発表では、『モラリア』と『英雄伝』を通して、プルタルコスを描く指導者像と哲人統治の思想との関係を考察したい。

『英雄伝』のコンテキスト

松原俊文

『英雄伝』に対する評価の変遷は、伝記というジャンルに対する評価のそれと奇妙に符合する。史学における近年の『英雄伝』再評価の流れも、過去を語る一形式としての伝記に、歴史叙述としての有効性が再認識されたことと無関係ではない。この伝記の復権は、社会史的視点を取り入れた人物研究やマイクロヒストリー、さらには多数の小さな伝記集ともいえるプロソポグラフィ研究の隆盛などにも窺える。けれども古典古代において、伝記 (*βίος*) は歴史 (*ἱστορία*) とは峻別された文学ジャンルであった。この理念上の区分は、「なぜなら私が書くのは歴史 (*ἱστορία*) ではなく伝記 (*βίοι*) であり」 (*Alex.* 1) 「あらゆる出来事について正確に伝えるのは政治史に属すること (*τῆς πραγματικῆς ἱστορίας*) ではあるが」 (*Galb.* 2) といったプルタルコス自身のことばにも示唆されている。だが、なぜ彼はことさらこのような断りを述べているのだろうか。それは、*ἱστορία* と *βίος* の境界が実践上必ずしも自明のことではなかったからではないだろうか。あるいは、彼の時代には自明でなくなっていたからではないだろうか。あるいは、『英雄伝』という作品自体が両者を曖昧にしうるものだったことを、作者自身が認識していたからではないだろうか。本報告はこれらの問いを手がかりに、以下のように議論を進める。

1. なぜ「伝記」か：歴史と伝記の境界

ギリシア・ローマにおける歴史と伝記の理論上の区分を明らかにし、それがどの程度まで実際の作品に適用可能か、プルタルコス、ネポス、スエトニウス、タキトゥスらの例を中心に検証する。

2. なぜ「政治家伝」か：ギリシアのモデルとローマの先例

ヘレニズム世界で文人の伝記集として誕生した伝記文学が、ローマ共和政末期から帝政期にかけて政治的指導者の伝記集へと発展していった経緯を概観し、プルタルコスの時代までどの程度ジャンルとして確立していたかを探る。

3. なぜ「対比伝」か：『英雄伝』のコンテキスト

ポリュビオスや大カトーまで遡るギリシアとローマの対比は、2世紀初頭のロ

一マ帝政下に生きたギリシア人にとって、いかなる企図を持ち、いかなる読者層を想定したものだったのか。それを同時代の背景から考える。

上記の考察をつうじて、『英雄伝』はどこまでジャンルの伝統を引き継いでいるのか、どこまで同時代の文脈においてジャンルの発展させているのか、といった問題に迫りたい。

『対比列伝』におけるプルータルコス「比較」と人物描写

中谷彩一郎

プルータルコスの『対比列伝』（いわゆる『英雄伝』）は、ギリシア・ローマの主に歴史上の人物を二人一組にしてそれぞれの伝記が述べられたあと、その比較（σύγκρισις）の章が付されていることを特徴としている（ただし、ない場合もある）。しかし、『対比列伝』に最初から全体として統一性や計画性があったわけではなく、好評のゆえに少しずつ書き足されていったものと考えられている。「アレクサンドロス」冒頭の「歴史（ιστορία）を書くのではなく、伝記（βίοι）を書く」という有名な言葉とそれにつづく文章は、プルータルコスの関心が歴史的事項よりもむしろ人物の性格や生き様にあったことを示しているが、それは多くの場合、倫理観・道徳観を伴っている。

少なくとも二人一組となった作品間では、なんらかの計画性があったのではないかと考えられる一方で、その比較の章を読むと、現代のわれわれの目からもっともだと思われるものもあれば、単に表面的な類似やこじつけとしか思われない強引な対比もある。こうしたプルータルコスによる比較と、各人物に関する描写の間の微妙なずれが指摘されることもある。

そこで、本発表ではプルータルコス自身の「比較」の章を出発点として、彼自身の分析と比較しながら、各伝記中での人物描写、とりわけ指導者像と関連する具体的な人物・性格描写に焦点を当てる。比較が成功している場合とうまくいっていないように思われる場合、模範的な人物の場合と反面教師的な人物の場合など、プルータルコスがテキストの中で実際にはどのように人物を描写しているのかを、数組の特徴的な例を挙げながら分析する。さらに比較の章と実際の描写とのずれがあるとすれば、具体的にそれがどういうものであり、どうしてそのようなずれが生じたのかを考えたい。